

川柳句集

白
い
梅

奥
田
み
つ
子



著者近影

白
梅

序 文

奥田みつ子さんが十八年の川柳作品を振り返り、これからのステップにしようという句集を出す決心をされた。

殊の外謙虚な方だから、あれこれ迷われた上のことらしいが、その快拳に双手を挙げて賛同する。

昭和五十六年、朝日カルチャーセンターの教室に見えてから、NHKカルチャーセンター、産経学園梅田第二、高島屋ローズカレッジ西宮と、教室は替わっても十五年間みっちり私の話を聞いて作句を楽しまれた。

パン捏ねるままならぬ身を打つごとく

パンを捏ねた経験は私にはないが、パンの捏ねられる姿を、まるで五体投地の身のように受けとる心象はすでに初心者離れをしている。

行き止まり水菜晶を戻るなり

この句の焦点は戻りしなに水菜の晶だと気付いたことである。水菜晶という語など、写真ではあるうが老練の味を備える。

だから、

淑女かと見れば狐のシルエツト

十二月月日に壁があるような

等の句に接して、

襟巻の狐の顔は別に在り

去年今年貫く棒の如きもの

という虚子の句の俳味に通じるところから、俳句の経験ありとお見受けしたこともあった。

みつ子さんのやさしさ温かさは、みつ子さんが傾倒されていた小出智子さんと同じに、ご家族を詠んだ句に佳句の多いことでも分かる。

姑は日々仏の顔になってゆく

幼子の如雨露に小さな虹が立つ

友達のめしも頼むと子の帰省

自信ある字になってきた子の手紙

文献のページ追う目よ男の眼

妻の意見いと小癪なり貴重なり

お母さんやはりあなたの娘です

鷺草咲いて美人家系に変わるかも

川柳作家に大切なのは、物を見る眼と自己を見る眼のしっかりしていることだ。

前者の句は

パリ帰りフランス人になれもせず

脱サラのうどん屋鉢に凝りすぎる

弱虫が王手王手とやかましい

幕降りたあとの芝居が面白い

幸せの身にも占うものがある

人形を抱いて避難所老いひとり

等々佳句は目白押しにある。最後の句は震災に際しての瞩目であろうが、みつ子さんの愛情がこの句を成さしめたものと思う。

また、後者の句は

果てしなく海に降る雪独りだな

影法師ときどき黒くなり過ぎる

真剣にジャンケンポンもしなくなり

月光に包まれ羽が生えてくる

などがあり、

正解は一つではない本閉じる

辞書を引くそうかそうかと言いながら

も、その範疇に入れることの出来るみつ子さんらしい句である。

女性に花の句の多いのは珍しくもないが、みつ子さんには梅の花を詠んだのが目につく。誕生日が一月のせいもあるが、冬の凜烈とした大気に咲く花と同じに句もきっちり引きしまっている。媚はないが乾ききつてもいない。今どきはやりの情念句という生半可でない川柳塔の色である。

そして、まさにその川柳塔の編集長として多忙な中に細やかな心遣いで、雑誌の作成に励んでおられる。一見関わりのないように見えるその日々の積み重ねが、川柳作品の深さ厳しさに繋がってくる。

みつ子さんのこのあと十年がたのしみだと申し上げて、お祝いの言葉と致します。

寝室にモンローという蘭の鉢

地球にはどこにも非常口がない

平成十年十一月

橘 高 薫 風

奥田みつ子さんの句集に寄せて

私の句に「別々のことを考えていて夫婦」というのがあって、奥田みつ子さんの句に「ああ夫婦おなじ時に胃が痛む」がある。意味と表現の違いこそあれ、たわいない夫婦の生きかたで奥に秘めた夫婦の愛情だと思ふ。

私が卒寿も過ぎて前回出した句集『むらさき』から十年経った。先も短いしここらが潮時と考え原稿を整理してコピーし、奥田みつ子さんに内容の点検と校正を依頼すると、声を低くして「実は私も句集を出すことになり、序文をお願いするつもりでした」と言われ、結局お互いに祝福し合うて責めを果たすことになった。同じ趣味をもつ者の考えは同じだなと改めて感ぜした。

奥田みつ子さんと知り合いになったのは十七、八年前だったと思う。阪急西宮北口駅近くの中央公民館で開かれていた句会に出席してお会いしたのが初めてで、その西宮北口川柳会は小浜牧人さんから橘高薫風さんに、そして若本多久志さんと引き継がれ、多久志さんが亡くなって私が会長をさせて貰

っている会で、みつ子さんとは長いお付き合いである。そのみつさんも請われて川柳塔社の編集長として活躍されている中、副会長もお願いしている。几帳面で控え目なご性格は作句にも現れていて、なかなかの名句もあり手本にさせて貰っている。

句評がいたって苦手な私だが、戴いた原稿から私なりに拾い集めて書かせて貰い、責めを果たすことにした。

やはり女性的な繊細さのある句が随所に見られ、その中で鋭い感覚の句もあった。

美女ひとり白磁の壺のたたずまい

湯けむりに少女の声のよくびびく

果てしなく海に降る雪独りだな

光みな集め一年生が行く

等々私の心をひいた句である。

ご家族の句も多く主婦としての立場、その心遣いと優しさを綴られた句に感動した。

真ん中に姑が座って恙なし

嫁だから返す言葉を選んでる

姑の死

薦もみじ土蔵に映えて姑は亡し

冬の虹姑が渡って行きそうな

亡姑の好物作って亡姑と対話する

ご家族を詠まれたのでは

父の部屋忍の一字が掛けてあり

母の忌に母の琴爪はめてみる

ふくらんだ餅を見つめている夫婦

鬼ヤンマ亡兄が帰って来たらしい

甘栗を上手にむいてくれた姉

平成七年の阪神大震災に際して

倒壊の屋根くろぐろと寒の月

人形を抱いて避難所老いひとり

等の句が見られる。拾い上げれば限りないので最後にはのぼのとした句を
発表し、ますますのご健吟を期待して筆を擱く。

春風に可愛い嘘の二つ三つ

茶漬サラサラ競い合うこと何もなし

ポストにも傘さしかけて出す手紙

平成十年十一月

黒川紫香

もくじ

序 文

橘 高 薫 風

句集に寄せて

黒 川 紫 香

小さな虹

13

薦もみじ

39

影法師

73

子の手紙

115

白い梅

157

あとがき

218

題字

著者

小さな虹

昭和五十六年～六十年

模型船作り男の孤独垣間見る

自己嫌悪ひたすら強く手を洗う

子離れの夫婦黙って電話待つ

パン捏ねるままならぬ身を打つごとく

姑は日々仏の顔になつてゆく

いかなごの釘だき春も真つ盛り

黄昏の窓際の椅子座るのみ

幼子の如雨露に小さな虹が立つ

ジェラシーの燃えつきたまま赤い月

涼風に命かるがる赤とんぼ

はじらいが裸婦の指からこぼれ落つ

手毬唄小さな影が遠ざかる

白い紙今年は何の絵を描こう

百日紅恋の華やぎ終りなし

さし向かい答を逸らす箸の先

命日に亡母の手料理まねてみる

娘の結婚に（二句）

ヴェール映えパイプオルガン巖かに

姉嫁ぐシャッターを切る一途な眼

生々流転他人の話面白い

日本画を見て日本人だなと思う

夫婦箸がまん較べを見続けて

旅人の胸に消えない北極星

熱帯夜浴衣でチンと座る姑

泰山木の白より白い夏の恋

白木 謹今日の命をいとおしむ

大阪 弁山手線でもよく喋り

私の同心円に誰を置く

美女ひとり白磁の壺のたたずまい

妹を叱ると姉が先に泣く

カシオペア空に預けた秋の恋

長城をその眼にとどむ武官備

夫のうしろ安全地帯と限らない

末っ子もいと神妙に屠蘇の順

アンデスの氷河茶の間に映し出す

昨日より今日の一步を強く踏む

鳥影の横切り我にかえる窓

飛行機雲熱い想いが今届く

帰省子の好物ばかり市場籠

意地悪をしたのに笑顔返される

一点を見つめ周りがぼけてくる

先ず生きるあとはボツボツ考える

行き止まり水菜畠を戻るなり

白梅の白より白い亡母の風

平等に残り時間が減ってゆく

人妻に幸せという刑もあり

子に負ける日を待っているお父さん

文献のページ追う目よ男の眼

中年に清純という恋もあり

伸直り出来ず青梅落ちるのみ

小さくともきれいな旗をあげておく

だんじりに従いて渡った樽屋橋

尺八の息細うなり父卒寿

肩の力抜けば定まる腰の位置

ペンキ塗り立てちよつと触つてみたくなる

ごみの箱だからきれいに洗つとく

姑と亡母いつしか影が重なって

黙々と子の助走路の石拾う

歩き疲れお地藏さまと話す

無駄少し入れて息づく設計図

毬一つそばに置きたい時もあり

白少し混ぜるとみんなあたたかに

やさしくて時々いけずする姑で

春風に可愛い嘘の二つ三つ

月光に研ぎすまされて冬木立

甘い実をいっばいつけた隣の木

俗っぽい話も好きな老詩人

白梅の蕾ふつくら白い恋

甘栗を上手にむいてくれた姉

父の部屋忍の一字が掛けてあり

例外もなく柿の木に柿がなる

母の忌に母の琴爪はめてみる

姑の足少しよろけて萩の道

八つ手の葉ふところ深い父であり

秋風に朝顔なおも紺を増し

子の瞳のぞけば青い空がある

蔦もみじ

昭和六十一年～六十二年

ライバルを褒める言葉があり余る

本棚に冬がドツカと座ってる

玉石混淆石になるのもむずかしい

父の死に寄せて（二句）

御長命でしたと他人は言うけれど

今にして父の言葉の重々し

友達のためしも頼むと子の帰省

胸の奥見せてそのまま貝になる

世界地図ひろげ息子のエメール

二階から息子のジャズが降ってくる

少年の机宇宙と向かい合う

合わせ鏡自分の裏に目を凝らす

才女いま可愛い顔の酒の席

握手する右手をいつも光らせる

スイートピー墓にも春の話する

梅漬けて壺も私も満ち足りる

愚かさを隠さず友の輪に入る

迷うだけ迷えば神の手が見える

自問自答いつもそこから進まない

哀しみの数だけ花の種をまく

女過去に生き男は過去捨てる

友が逝く二日ほどしてから地震

パリ帰りフランス人になれもせず

虹ばかり追って女は雲を見ず

神さまに任す勇気がまだ持てず

みどり児は愛の形のまま眠る

露草の哀しみ青い露宿す

中国紀行（二句）

クレーン林立北京大路に陽が昇る

さわやかな秋おおらかに笑む飛天

秋風に白いブーツのお嬢さん

初光六甲山も改まり

寒雀お前も少しダイエット

トップ交代掃除の仕方まで変わる

美しい人うつくしい嘘をつく

満月に向かつて歩き出す枯野

得しものと失いしもの恋終る

イミテーション若さに怖いものはなし

完全主義長いトンネル抜けられず

水銀灯春の愁いを深くする

てっせんの紫朝の空気澄む

竹の里まっ正直は罪なもの

別れの駅にせアカシアの花が散る

破れてはいても大きい父の傘

湯けむりに少女の声のよくひびく

淑女かと思れば狐のシルエット

夢二描くおんな見つめてゐる女

仲間から仲間楽しくなる波紋

石畳コツコツ明日をどう生きる

いさかつて書齋にこもる男の背

ダイヤよりガラスの光る時もある

ひとり旅牧場に秋が透き通る

三角形の二辺を歩く恋になり

木のぼりの天才いつか翔ぶだろう

真ん中に姑が座って恙なし

息抜きも上手になった珊瑚婚

豆腐屋の手におトウフの行儀よし

嫁だから返す言葉を選んでる

半跣思惟まねて迷いがとけるなら

善意と善意いつもどこかですれ違う

菊の帯菊の気品を身にまとう

この辺で眠りに落ちている栞

秋風におろかな手紙ことづける

ペン皿に国際人の視野がある

正解は一つではない本閉じる

叱られてそれから好きになりました

姑病む(三句)

亡母よりも長い絆の嫁姑

ママママと頼り切ってる二度童子

看病に疲れ花屋で深呼吸

姑の死（二句）

蔦もみじ土蔵に映えて姑は亡し

好物がまだ棚にある二七日

大根になる夢捨てぬ貝割菜

冬の虹姑が渡って行きそurna

じんむすいぜい菊の系譜をまだ覚え

十二月月日に壁があるような

シヤム猫を抱いて老醜寄せつけず

自惚れてまた落ちこんで独りの灯

春風に自縄自縛のほぐれゆく

あどけない声でいじめの話する

空調の音かすかなり美術展

脱サラのうどん屋鉢に凝りすぎる

平均的くらしと思うところてん

葉げいとう嫁の立場で口を閉じ

淋しさに母母母と書いている

電話口夫婦喧嘩のあとらしい

女とはまた男とは源氏読む

星まつり願いは何もないと言う

黄昏を楽しむ本を持っている

つるし柿いつか疎遠な兄いもと

秋の肌亡母の着物がよく馴染む

神さまの答はいつも突然に

客の座にすわって直す額の位置

ふくらんだ餅を見つめている夫婦

ペーパーナイフ不器用なりに生きてます

自画像のバックは青いあおい空

洛陽・西安紀行（二句）

白居易の墓しつとりと萩の中

仲麻呂の涙か古都の霧深し

渦巻きパン渦の通りに食べてゆく

負け犬に他人の痛みよく判る

火をくぐり白磁はなおも白を増す

輪廻とや猫がしきりに膝にくる

影
法
師

平成元年～三年

魁夷の絵見つめ深まりゆく秋思

行く秋に源氏絵巻はしずかなり

木犀のみの虫までも香りそう

娘には娘の家庭松飾り

羽根ペンで脅迫文を書いている

一番星初心をいつも胸に置く

雪国の情けにりんご赤くなる

自分の齡を忘れてしまうので困る

掌中の玉が時々する謀反

情け深い男のひげがよく伸びる

再会に耳の形がよく目立つ

やわらかに二人を包む銀の雨

正義派よお前に欲しいのは情け

高い鼻劣等感も持ち合わせ

寒いからむさぼるように本を読む

果てしなく海に降る雪独りだな

愚痴を書くペンはぎしぎし音を立て

頭から英語が降ってくる機内

カラスの声雪が頭に落ちてくる

物指しを女は急に変えられぬ

雨の午後五目ならべをする夫婦

紐を組む紫色は思慕の色

幸せが逃げそうだから窓しめる

言葉飾ると猫もするりと膝を下り

飾らない言葉が耳によく馴染む

花明かり庭が少うし騒がしい

春愁の書棚に探す志賀直哉

会者定離駅の時計は無表情

賑やかに集まりひとりずつ帰る

物分かり良すぎ淋しくなってくる

両方の気持が分かるから困る

写経する無の字無の字を丁寧

兄が逝く星の向こうに星が降る

影法師ときどき黒くなり過ぎる

春駒の土鈴も飾る初節句

慌てても残り時間は変えられぬ

力いっばい畳を拭いて何を消す

行きずりの菊に触れば香が消えぬ

余計なもの見るから瞼重くなる

雲流れゆるゆる解けるわだかまり

ご機嫌な財布はすぐに軽くなる

皮表紙ページに亡父のドイツ文字

春の夜の子供にかえるオムライス

真心にリボンをかけたシクラメン

鼻の高さ分からぬままに面を彫る

甘えることを知らないままに妻老いる

誰よりも好きで嫌いなのが自分

夫婦喧嘩コップの中の嵐だな

ひたすらに歩き足跡など要らぬ

近過ぎて自分の鼻がよく見えぬ

駅のベンチに座布団並ぶ風の町

ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む

慣れすぎて平和な日々が物足りぬ

雨の夜は亡母と話をしています

先生の先生のこと聞かされる

船出する潮がなかなか満ちてこぬ

転ばねば土のぬくみが分からない

よく降るなと後は黙って二人きり

遠花火無欲になったなと思う

少年は魚眼レンズを持っている

赤い服きつと淋しい人だろう

幼子が地藏に持たすねこじやらし

蚊緋の浴衣の似合う背の高さ

お隣と比べる癖は持っていない

身の隅の虫が悪さしてならぬ

太陽が今日も怒ったまま沈む

仲良しが美人でわたし困ります

いつの世も恋は劇薬　恋は蜜

天下国家を論ず聞き手は妻ひとり

輪の中のピエロになって生き延びる

秋桜多くの友に恵まれる

淋しくて大きな辞書を傍らに

意外性秘めてつぎつぎ子は育つ

あれは皆まぼろし許し合うことに

鏡の奥女に限りない広さ

辞書を引くそうかそうかと言いながら

すきやきに一人になった日を思う

若やいで新春の床バラ活ける

デイオールの靴も踵は減るのです

恋人と走ると枯野息をする

眼鏡かけてはずして探すものは何

胃ぐすりも飲まず女は耐えている

娘には娘の進む道あり雛飾る

影踏みの子を探してるお月様

暗い庭を向いて男の涙落つ

百舌鳴いて郵便受けに何もなし

身を飾っても淋しさに変わりなし

さまざまな彩を友達から貰う

枯野ひとりきれいごとなど要りませぬ

辛抱の形に足袋が干してある

雲悠悠々私も休むことにする

古い話たくさん持って姉と逢う

ハーモニカ牧場に楡の影長し

小半日海を見てきた片想い

夕桜いのち放電するごとし

エスカレーター下から人が湧いてくる

黄昏の膝にひろげる広辞苑

ロマンには遠く鏡を見つめおり

虚しさも分け合ひ夫婦静かなり

やさしいだけで弱い男じゃありません

咲く前のふるえるバラを見ています

斜めから手を貸す友がいてくれる

雲ひとつ映すプールに人はなし

風の中生命ひとつを持て余す

鏡見るとためらうことが多くなる

気短な妻にゆっくり返事する

風みどり命ゆつくりふくらます

峠越す度に自分を褒めてやる

柘榴の朱なお煩惱の数知れず

白い桔梗女は弱きものならず

人間のつもりの影に尾がのぞく

秋風に同じ傷もつ人といふ

それぞれの過去美しき顔の皺

八月の仏に白い米を炊く

影法師時に手強い敵になる

大河滔々おんなじ水は流れ来ず

あべこべに辿ると謎が解けてくる

弱虫が王手王手とやかましい

哀しみをみな吸い込んだ空の青

遠近法秋が次第に遠ざかる

永字八法墨には墨の息づかい

幸せを掴む片手をあけておく

子の手紙

平成四年～六年

初光菊一輪の文机

疑えば耳に住みつく小悪魔

寝転べば蟻と話がしたくなる

昨日よりいい顔ですか姫鏡

暮れの街われに一男一女あり

桃の花女の欲は他愛なし

国道はもう人間の道でなし

プライドをつつむ風呂敷濃むらさき

翠洋会十周年

十年の翠に憩う人や佳し

焼いもの笛としばらく散歩する

雛の月久しく逢わぬ姉いもと

毎日があしたあしたのりハーサル

祖母から母私に続く重いもの

由緒ある地名を消して文化とや

頬杖の目は景色など見ていない

人生薄暮駆け抜けてゆくものがあり

父の日も父は書齋にこもりきり

どうしても好きになれない全自動

四面楚歌井戸の深さに救われる

限りなく土あたたかし比翼塚

寝室にモンローという蘭の鉢

時々は尊敬もして夫婦です

くるくると少女の日傘陽を集め

拋物線えがき私が落ちてゆく

幕降りたあとの芝居が面白い

三部経母は今でも生きてます

大嫌いな自分に今日も化粧する

友達が欲しくはないかサボテンよ

しっかりせよと起こしてくれたのは女

あれも恩これも恩生かされている

忘恩に梅の白さが目に沁みる

薔薇とバラ静かににらみ合っている

菜根譚争いごとに遠くいる

花つけてサボテンさえも恩返し

白の自負染まりたくない色もある

手は二本摺みたいものたんとあり

暦にはない祝日が胸にある

さびしくて行く公園のなお淋し

これでいいともこれからだとも思う

つまずいてふとタンポポと目を合わす

足跡を残さぬ年もあって良し

これも歴史二人でお茶を飲んでいる

夕桜亡母の琴の音聞いてます

地球儀を回してごらん淋しい日

幸せの身にも占うものがある

臆病な人だと思ふ齒科の椅子

茶漬サラサラ競い合うこと何もなし

美しい錯覚でよし男と女

再会の友は今でもお茶目さん

家中をまんまと嵌めた四月馬鹿

出藍の誉れとなるか鯉のぼり

偽らぬ自分をさらす場所がない

白牡丹白に徹して迷いなし

軒下の石白父母はもう居ない

双葉もう大きな支柱立てられる

自信ある字になってきた子の手紙

偽りの言葉が甘くひびく時

躁病の猫を見ている梅雨の午後

雨三日辞書の散歩をしています

時々は見えない尻尾振っている

仮の世を散歩と思うこともある

聞き役がいつしか性に合ってくる

妻の留守家の空気が動かない

青信号続くそろそろ落とし穴

稲光彼が怒っているらしい

秋の坂白い小犬とお嬢さん

久しぶり並ぶ息子の背の高さ

白桔梗いつかは嫁ぐ孫娘

後ろばかり見るなど影を叱りつけ

優越感くすぐる本を傍へ置く

プラス思考明るい言葉ばかり選る

米櫃を満たしゆっくり本開く

自分でもきついと思う言葉尻

幕切れは明日かも知れぬそれも良し

妻の意見いと小癪なり貴重なり

除夜の鐘わたしの他に私は居ない

ある時は底なし沼にいる私

落ち葉はらはら遠くで琴を弾いている

脱皮繰り返しだんだん小さくなる

飛ぶことを諦めないでいる駝鳥

春の水キラキラ夢を語り合う

時々には自分に拍手してあげる

歎異抄閉じて鏡と対峙する

さりげなく栞はさんで返す本

落花さかんまた決断を迫られる

万愚節わが愚かさも愛すべし

裸木は裸わたしは見栄を着る

今はただ黙って歩く霧の中

ハガキ一枚心の模様まで見える

今日もまた恥をかく顔洗いおり

平凡な夫婦しずかに日を重ね

真剣にジャンケンポンもしなくなり

忘れ心ポワンと夏の陽にさらす

群れて淋し群れを離れてなおさびし

悩みごと生きる証と言われても

芯とがらせて書きたいことがあるのです

無為の日々鈴を鳴らして秋が来る

個性派で行進曲が似合わない

地球にはどこにも非常口がない

心かわいて言葉を探す花さがす

さるすべり花の間に秋が見え

敬って貶して今もまだ夫婦

落日のクレーン明日を待つ構え

あるがまま自分をさらし秋に佇つ

情報の海眞実は沈みがち

車窓は秋亡母に似た人座ってる

悩みごとみな吸い込んで陽はまっ赤

強がってみても群れから出られない

人生よ喜怒哀樂が縞になる

柔らかい瞳に傷口をさらす

電話ベル予感どおりの声とする

服買った帽子買ったと他愛なし

一人だけおしやれをしてもつまらない

崖っぷちを生きてゆくのも面白い

別れ道キラリと秋の水光る

秋さなか妻という字を洗いおり

ゴミ袋どれだけ恩を捨てている

することの何もなくなる日が怖い

苦手だな相手もきつとそうだろう

あるがままにあるがままにと言いきかす

まばたけば夕陽に小さき菩薩像

生け垣を洩れる琴の音山芦屋

白
い
梅

平成七年～十年

眼の端に入れてください仏様

許し合う形に萩が揺れている

平和かな青年の掌やわらかい

真心をあげてわたしは空っぽ

今日もまた書斎にこもる男の背

ラグビー場男怒濤となって笛

子は鏡私の短所よく見える

阪神大震災（十句）

地割れ道山茶花の白揺れている

山門の崩れ見下ろす大銀杏

震災地蠟梅の香に変わりなし

夢の中さえ五時四十六分の時計

倒壊の屋根くろぐろと寒の月

美術全集互礫に埋もれ雨に濡れ

人形を抱いて避難所老いひとり

体より心が揺れる地震以後

水の出た蛇口思わずありがとう

一月十七日ひたすらに忘れたし

粉々に愛が碎ける梅が散る

飲みこんだ針は死ぬまで吐き出さぬ

黒少し混ぜると浮世生きやすし

長所だけ見える眼鏡を傍へ置く

人間の皮は被っているものの

封をした昔が騒ぐ春の宵

本棚の隅に春愁うずくまる

プライドというもののあり針葉樹

木洩れ日が降る淋しさの背なに降る

絹のハンカチ崩れるバラを見ていたり

つぎはぎの姿で佇っている私

鏡に向けて撃つ輪ゴムのピストル

月光に過去から伸びる影法師

大文字母は仕合せだったのか

熱帯夜書を読む父は汗もなし

首筋が寒い仮面がずれている

鬼ヤンマ亡兄が帰って来たらしい

白い芍薬抱いて母の忌実家の道

母の忌に母のコピーが並びおり

かなしみがコトンと胸に落ちて秋

四面楚歌雲はポツカリ浮いている

萩の道去り行く人の影が伸び

叱られる稽古ばかりをしています

聞いてみたい本音言わないだろうなア

ひとりの夜わたしを隠す袋縫う

チンチン電車走る姫松北畠

秋深むツインビルにも翳雲

うぬぼれが半分あつて生きられる

娘が歩く私と同じ歩き方

芒野の明るさ亡母に逢えそうな

両手のないこけしも耐えているのだな

鎮魂の海皓々と丸い月

いいことがありそう風がみどりいろ

春愁にしばらく音のない世界

好きな人の電話ベルには彩がある

白梅と向き合ういのち誕生日

梅林を歩く詩人の顔をして

同姓同名きれいな人で居てほしい

静かな暮らしに早口のテレビ

弱いから黙って風に揺れている

秋のコント蟻を哀れむきりぎりす

片方の足が後ろを向きたがる

山はむらさききこだわり徐々に溶けてゆく

ありふれた会話また良し珊瑚婚

机の前ホッと溜息つくところ

政治家のささやか庶民とは違う

冬の雲ちやらんぼらんに憧れる

白梅の思案深げに咲きはじめ

主役にはなれない顔が徒党くむ

そして一年わたしは餅を焼いている

読経耳に花の散るのを見ていたり

嘘のかけら集め真実見えてくる

美しい嘘つらぬいて地獄まで

蜘蛛の糸ゆれて生きると言うことは

いらいらのお蔭流しがピッカピカ

母よりもだんだん姑に似る仕草

お母さんやはりあなたの娘です

私とわたし今日もケンカをしています

バラ咲いて散って答の出ない道

モジリアニの女となっている秋思

有刺鉄線真紅のバラは向こう側

バラが咲くと思う必ず薔薇は咲く

切っ先を社会に向けて描くマンガ

仮の世に仮の姿でいる私

落ちてから猿は初めて木を見つめ

白バラに華やぎもらう備前焼

時々は同じ意見になる夫婦

新世紀へ向けてすらりと伸びた足

明日散る花懸命に咲いている

みやげ話熱い焙じ茶飲みながら

光みな集め一年生が行く

春愁に自分の長所挙げてみる

母の涙あれが孝行だったのか

みどり着ておんな緑の精となる

手鏡にひとり独りと言いきかす

サボテンの刺いばってる威張ってる

パン種が膨らむ私より素直

目移りの果てに選んだ毒の花

広辞苑森はいよいよ深くなる

泳ぎ疲れポツカリ浮いて空を見る

繁盛のかげ諦めた恋がある

繁盛に母刀自おわす奥座敷

吾亦紅死ぬまで謎を秘めている

遠く住む孫の代りに隣の子

魂を奪った虹が消えてゆく

冬の梢観音さまがおわします

握手した手に残されたバラの刺

苦心談聞いているのは猫ばかり

欲張らずあるがままにと初日記

元旦浄机広辞苑にもおめでとう

蒼天に昨日のわたし抛り上げ

六段の調べ母も私も若かった

満足の形にハブラシが二本

月光に包まれ羽が生えてくる

はりねずみ程々の距離ほどほどの温み

夢の中勝手に入る人がいる

あたたかい記憶子が居た母が居た

打てばひびく友達が
いるコ・ワ・イ

同じ刻を生きてる証
夕桜

クレーン直立その復興に
月しずか

花束を持つ青年の悪びれず

花道は知らず書齋に閉じこもる

階段の一步いまでも左足

母の日よ無性に欲しいベビー靴

美しい錯覚があり生きられる

時々には仮病つかって休まねば

うとましい花だ整いすぎている

テレビテレビ違う世界が動いてる

花に水やり命とは命とは

かなしみが光る雫の形して

いつまでの命と思う山の音

字を探す辞書と遊んだ小半日

本ばかり相手に淋しくはないか

星占い細い絆を大切に

親も子もブランドを着る神戸線

限りない欲に生かされ生きている

虫を聴くかえらぬ人がまた一人

小出智子さんを悼む（二句）

緑濃き山ふところに還られし

錯覚か鳴るはずのない電話ベル

鏡には映らぬ顔を持っている

数知れぬ恋人がいる本の棚

思
い
あ
ぐ
ね
飴
玉
一
つ
口
に
入
れ

書
齋
か
ら
出
る
と
男
は
他
愛
な
い

手
抜
き
し
た
家
事
に
仕
返
し
さ
れ
て
い
る

大根がやわらかく煮え風の音

盛り場に戦を知らぬ長い足

黒を着て女に恋の喪は明けず

ポストにも傘さしかけて出す手紙

雪霏々と美しい死に憧れる

鵜にもなり鵜匠にもなり凡夫婦

冬だ冬だと北風小僧いばっている

今はもう人類愛という夫婦

迷彩服戦も知らずヤングたち

年新た机に「無我」の絵を飾る

義兄葬送るパイプオルガンきれいすぎ

蕾さえやさしい言葉待っている

少し怖くて少し楽しみ扉を叩く

ミニバラも薔薇だバラだと自己主張

沈黙考石もいつしか息をする

等身大の鏡を贈る子の門出

忘れていた昔ポツカリ昼の月

五月晴れわたしの裏を陽にあてる

地に伏して祈ったこともある日記

母の日に子のフィアンセの花届く

赤鉛筆片手に今日はシチュー煮る

亡姑の好物作って亡姑と対話する

人形を抱く人形とおなじ顔

傷心を仲間だまって包み込む

スタートは今遅すぎるはずはない

臓器移植人は機械と違うはず

帽子似合う女に生れたかったな

友の葉書字までニコニコ笑ってる

空は公平一人に青いわけじゃない

自分には見えない顔をいつも曝して

猫じゃらしコップに挿して虚ろなり

ぶつかった壁におじぎをして抜ける

息子の結婚に(三句)

恥じらいのまなざし伏せる綿帽子

鷺草咲いて美人家系に変わるかも

姑となる亡姑と暮らした日を数え

オカリナが低く流れて子が巣立つ

明日こそ飛ぶと駝鳥が駆けまわる

夕日美しきつと楽しい明日になる

あとがき

昭和五十六年四月、朝日カルチャーセンター川柳教室に入ったことが、私の人生を大きく変えました。子離れの寂しさを紛らすために始めた川柳が、今では私の生活の大部分を占めるようになりました。

その川柳を私は少しも分かっていないのではないかと、十八年経った今頃になって気がつきました。十五年間も橋高薫風先生の薫陶を受けたにもかかわらず、ただ、句会があるから、投句の締切りが迫るからと、何となく川柳らしいものを作っていたに過ぎなかつたのです。ここでゆっくり振り返って、もう一度勉強し直さなければと思い、ちょうど息子が結婚するということもあり、気持を新たにするために句集刊行を思い立ちました。七月初めに、薫風先生に自選した一五〇〇句を記したノートをお預けして、選句と序文をお願いしました。来年一月に出版の予定をしておりますところ、十月になって黒川紫香先生から句集発刊のお話を伺い、私と

殆ど同時期になり、お忙しい時に序文をおねがいするのも心苦しいので、私の句集は中止しようと思いました。

けれども、薫風先生から折角思い立ったことだから、紫香先生に事情をお話して出版したらとのおすすりめもあり、また、句集を出すについては私の健康や、家族に支障があれば出来ないことなので、今ならばと予定どおり出版に踏み切ることになりました。

ちょうど紫香先生からお預かりしていた句集の原稿をお返しする時、事情をお話して序文をお願いしたところ、快く書いて頂けることになり、ホッといたしました。いろいろ迷った末の拙い句集ですが、これからのステップにいたしますので、お目通しいただければ幸いです。

橋高薫風先生、黒川紫香先生から、お心のこもった身に余る序文を頂戴し厚く御礼申し上げます。世間知らずの私を支え導いてくださいました多くの先輩、柳友の方々から感謝申し上げますと共に、これからも御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

そして本が出来ましたら、小出智子さんの御霊前にお供えし、喜んで

いただくつもりでおります。

句集発刊にあたり、校正など何かとお力添えを頂きました田中正坊さんに厚く御礼申し上げます。また、家事を時々手抜きしている私を許して、温かく見守ってくれた家族に感謝して筆を擱きます。

平成十年十一月

奥田 みつ子

柳 歴

- 昭和56年4月 朝日カルチャーセンターで川柳を受講
昭和56年6月 西宮北口川柳会に入会
昭和57年4月 『川柳塔』誌へ初投句
昭和58年10月 川柳塔社同人
昭和60年10月 路郎賞準優秀作第二席受賞
昭和63年10月 路郎賞準優秀作第一席受賞
平成2年10月 路郎賞受賞

川柳句集 白い梅

平成十一年一月一日発行

著者 奥田みつ子

〒663 806 西宮市段上町六一六一二〇二
電話 〇七九八―五二―五三三―

発行所 川柳塔社

〒545 006 大阪市阿倍野区三明町二一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
電話 〇六一六六―九一六九―四

印刷 美研アート

頒価 〇〇〇円